

〈バッハの国から来て バッハの国に帰る〉 ワルブレヒト一家

去る 6 月 4 日、新日本フィルハーモニー交響楽団 ヴィオラセクションの主催によるコンサート「J. S. BACH の夕べ」が、品川教会において開催されました。そのチラシに、〈バッハの国から来て、バッハの国に帰る G. ワルブレヒト氏との 16 年を記念して〉とあるとおり、この年末に新日本フィルを退職されるゲルハルト・ワルブレヒトさんのために、そのお仲間が手作りで準備された演奏会でした。

私たちの合唱団とも、定期演奏会でのヴィオラ演奏にとどまらず、ご一家をあげて、とりわけ深いお付き合いをしてくださっており、ご本人のお申し出で、東京バッハ合唱団からも各パート 3 人ずつの参加が要請されて、カンタータ第 106 番をうたう〈ゲルハルト・ワルブレヒト氏に集う有志〉合唱団が編成されました。

ワルブレヒト氏は 1985 年に、当時の東ドイツ (DDR、ドイツ民主共和国) から、ライプツィヒの音楽大学で出会われた幸子夫人、長女ナナ (奈々) さん、長男フレッド (洋) 君、当時 8 歳だったヴィオラ (すみれ) ちゃんのご一家とともに日本に移住され、新日本フィルに 16 年間在籍されました。

出国 2 年前の 1983 年、東京バッハ合唱団の第 1 回 DDR 演奏旅行のおりには、ライプツィヒのトマス教会にご一家で出かけられ、私たちの演奏をお聞きくださったとのこと。それが 20 年に近いご縁の始まりになりました。

✦

記念の演奏会に参加して

山下 広之 (団員)

20 年近く東京バッハ合唱団と家族ぐるみのお付き合いをしていただいたヴィオラのワルブレヒト氏が、新日本フィルを退職され、12 月 16 日の私たちの定期演奏会を最後に、故国ドイツに帰られることになった。この記念のコンサートには何をおいても出演させていただく意義があった。

成城合唱団の練習場である成城学園にもお伺いし

た。その日は、遙か千葉県から参加した私が一番乗りで、鍵も開いていなかった。時間待ちのために成城の町を久しぶりに散歩したが、美しい街並みに感動を覚えた。途中、この町に住んでおられるワルブレヒト氏が合唱団の練習に出かけるのと出会い、練習後のご自宅での昼食会にご招待をいただいたが、残念ながら私は都合がつかなかった。練習では、ワルブレヒト氏の緻密な指示で内容に沿った表現の方法を学び、密度濃くご指導いただけた。

5 月 30 日 (水) の午後 7 時から、最後のオケ合わせが、すみだトリフォニーホールで行なわれて最終調整がおわり、帰りに東京バッハ合唱団のメンバーは、錦糸町駅前のつばめグリルで、当日の成功を祈って練習の打ち上げを盛大に行なった。

演奏会当日、私は仕事の都合で舞台リハーサルには間に合わなかったが、コンサートの第 1 部を会場のすみで最初から聴きつつ、バッハの音楽の雰囲気を中心にしだいに盛り上げていった。約 500 人の満員札止めの聴衆は、固唾をのんでバッハの音楽に聞き耳をたてていた。原曲指定どおりのヴィオラ四重奏で、カンタータ 18 番の冒頭シンフォニアは燦し銀のような音色、第 2 曲目の器楽だけによるモテット 3 番、第 3 曲目はブランデンブルク協奏曲第 6 番のヴィオラの熱演、そして第 4 曲目にはワルブレヒト氏も登場して「音楽の献げもの」から 6 声のリチエルカーレが演奏され、前半を終えた。

休憩の後がいよいよ、ワルブレヒト氏の指揮により、われわれも歌うカンタータ 106 番の演奏だった。ヴィオラ・ダ・ガンバのパートをヴィオラが奏する弦合奏と、リコーダーに代わってフルートによる演奏では、どんな楽器でも受け入れるバッハの音楽の寛容さと幅の広さを再認識することができた。

ワルブレヒト氏も、おそらくバッハの故郷でこれからも活躍されることであろう。いつかわれわれも再びドイツを訪れる機会もあろうと思うが、その再会の日を夢見て、夕闇濃い品川教会の道を家路についた。

✦

ワルブレヒト家の人々との思い出

中村 美子 (団員)

すみれちゃんと第2回DDR演奏旅行に同行したのは、1988年の夏のこと。あのとき彼女いくつだったのでしょうか。ふだんは大人しいすみれちゃんが、若い添乗員の青年との会話中、ちょっとはしゃぐと、あの大きな瞳がいつそう大きくなるのを、楽しく、そっと見守ったものです。そして、アイゼナハのゲオルク教会での、おじいちゃま、おばあちゃまとのご対面。それは私どもにとっても、ひとときわ印象に残る光景でした。あれから1年少々で、東西ベルリンの壁が落ちるとは、誰が予想したでしょう。

1989年の野尻湖合宿。あの神山教会で私たちのうたうカンタータ75、76、78、168番を見事に支えてくれたのは、若いピアノの関(現・中島)紅子ちゃんと、チェロの洋君の、豊かな音楽性でした。あの夕べも美しい思い出のひとつです。洋君もきっと、すてきなチェロ奏者にご成長のことと思います。(注・現在ゲッティンゲン大学神学科で卒業を控えておられます。)

オケ合せを終えて、三軒茶屋のバス停にそろったワルブレヒト家の人々(ヴィオラのパパに寄りそうヴァイオリンの奈々ちゃんと、当時はアルト団員のすみれちゃん)に、「さようなら!」というのも、心なごむことでした。

私どもの定演のたびに、いつも静かに、しかも情熱的に、松井啓子さんとともにヴィオラのパートを聴かせてくださったワルブレヒトさん、そのワルブレヒトさんの帰国がきまって、彼を慕うヴィオラのお仲間が催すオール・バッハの演奏会。そのプログラムの最後の106番のカンタータ「神の時はいとも正し」を、成城合唱団の方々のなかに入れていただいて、歌うことができたのはとても幸いでした。

指揮は、もちろんゲルハルト・ワルブレヒト氏。いつも寡黙なワルブレヒトさんも、バッハのカンタータとなると、わけてもことばには大変きびしく、なかなかOKを出してくださらない練習が続きました。本番は、時に情熱的でありながらも、まことに穏やかな氏の微笑に支えられて、バッハらしい演奏ができたと思います。鳴り止まぬ拍手に応え、アンコールでうたった147番のコラールには、共に、いろいろな思いが込められていたのではないのでしょうか。

当日、リハーサルのときから、そっと見守っていたもの静かな奥様も、演奏が終ると、その頬を染められたようにお見受けしました。

ワルブレヒト家の人々 1996年撮影



バッハの国からやってきたワルブレヒトご夫妻は、再びバッハの故郷へもどって行かれるのです。そこにはすでに3人のお子さんが待っておられます。バッハのふところに抱かれて、ワルブレヒト家の居間からは、弦楽クアルテットが、そして時には奥様のピアノも入って、ピアノ5重奏が、きっと夜遅くまで聞こえてくることでしょう。

ワルブレヒト家の皆様、日本での16年間のお付き合い、ほんとうにありがとうございました。

♪

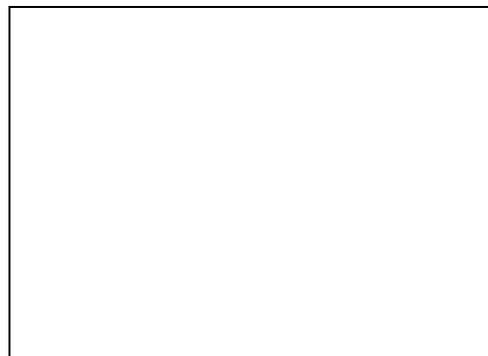
ありがとう、ワルブレヒト・ファミリー

川合 満里子 (団員)

私たちは、みんなバッハの音楽を愛し合唱を楽しんでいるのはもちろんのことですが、すみれちゃん一家がいて、私たちにバッハをより身近に感じさせているのだと、いつも思っています。

すみれちゃんのおじいさん、おばあさん、そのまたおじいさん、おばあさん、そのまた…が、バッハの生きた時代に、きっとバッハの演奏するオルガンを聴いていたにちがいない、もしかしたら子供のころ、バッハと一緒に合唱をしていたかもしれない等と、いろいろ想像をめぐらすと、人間としてのバッハが感じられてきて、ますますバッハが好きになるのだと思うのです。本当にありがとう、ワルブレヒト・ファミリー!!

子供のころのすみれちゃんは、明るい色の髪のおかっぱがとても愛らしく、練習のとき、先生にドイツ語のお手本を頼まれると、はずかしそうに小さな



声で読んでくれましたが、その低く静かなやわらかい声がとても美しかったのが印象的でした。

野尻湖の合宿で、洋さんのチェロと紅子ちゃんのピアノのリハーサルは、2人の若き音楽家の、音楽に対する情熱・エネルギーが、私たちの肌にしっかりと感じられました。帰りの日のバスで、洋さんはリュックの上にかかえもあるルバーブの束を積んでいて、「お母さんにプレゼント」とにっこりしている、とても優しい高校生でした。

奈々さんの美しい演奏姿や、先日、品川教会で聴いたワルブレヒトさんの素晴らしいヴィオラの音色、奥様の手作りケーキのとてもおいしかったことなど、思い出はつきません。いつもエレガントでいて堅実で、背すじがスッとしているご一家。本当にありがとう、ワルブレヒト・ファミリー!!



大村先生ご夫妻、「バッハの夕べ」に参加してくださった合唱団の皆様

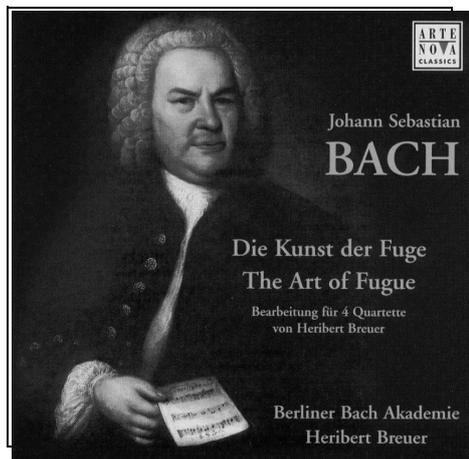
100%のご協力と献身に心から感謝いたします。また、すばらしい記念品をいただきまして有難うございました。

Sachiko Shiga-Wallbrecht
Gerhardt Wallbrecht

CD紹介

J. S. バッハ (H・ブロイアー編曲)
「フーガの技法」

Heribert Breuer 指揮、Berlin Bach Akademie
(ARTE NOVA CLASSICS)



先日、「フーガの技法」の興味ぶかい盤を入手いたしまして、一聴しまして、これが非常に面白かった。アルテノヴァ・レーベルは録音の良さと斬新な企画で好感を持っているのですが、この盤もなかなかのものであると思います。

ここ数年、私はクラシックはほとんど聴く機会がありませんでした。語学カセットや洋画を録音したものばかり流して、例外的に通勤途中に、ウォークマンに入れて聴いていたのは、ブルックナーの交響曲5番(入手できる盤はほとんど買った)の終楽章と、「フーガの技法」(リステンパルト、ザール室内)の終結部近くに現れる投影フーガの2曲だけでした。ブルックナーはともかく、バッハのこの2曲は、聴けば聴くほど、その異様な深みと無限的な生命力に震撼させられます(もっともこればかり聴いているというのも異様ですが)。

「技法」という作品は、「音楽の献げもの」と並んで、バッハの作品中では特異な存在ですが、昔から愛好していた曲です。以前、角倉一朗氏が解説していた「バッハ連続演奏」というFMの番組の掉尾にその中の「未完のフーガ」が、やはりリステンパルトのもので演奏されたのですが、私にはこの曲との最初の出会いであり、その時の衝撃は忘れることができません。

その後、同じ演奏のレコードを買って愛聴していましたが、それから今日に至るまで様々な波乱に見まわれることになる自分にとって、やはりこれは大きな力を与えてくれたと考えています。

バッハの「パッサカリア」のように、暗闇の中で光を求めつづける状況が延々と20年以上も続きますと、この先に本当に夜明けがあるのかと思ってしまう時もあったものです。しかし、「神は見ている。見ていないようでいてやはり見ている」というのは真実であります。ようやく昨年あたりから生活全般におきまして、光がさしてきたことを感じているのであります。

この「技法」に限らず、最近のバッハの演奏は、かつてのクレンペラー、カラヤン、シューリヒト、リヒター等の大指揮者による大編成の演奏という形態が影を潜め、古楽器を中心にしたチマチマした室内楽的なスタイルが主流になっているのは、実に残念なことだと考えます。レオンハルトやブリュッヘンのような人が出てきたときは、これはこれで一つの主張かと思ったものだが、最近ではそれがバロック演奏の主流然としていて、先述したような大編成による演奏は犯罪に近い目で見られるというのは、やはりおかしいと思う。

あの連中の発想というのは、源氏物語など古典の

作品の現代語訳、あるいは漱石や鴎外の作品の現代仮名遣いをいっさい認めようとしなない古文書趣味に似ている。それはバッハのもつ宇宙的、永遠的な音楽性を未来に繋がるものとして捉えず、彼の生きた様々な制限のあった音楽環境に縛りつけてしまうことであって、それは文献的に価値があるのかもしれないけれど、それをことさら主流派として認識するという態度は、悪趣味としか思えないのであります（彼らの演奏を聴いていると、バッハが仕えていて、さんざん彼が悩まされた、頭の固い封建的な教会幹部連中を思い浮かべてしまう）。「技法」についても、以前のようなフルオーケストラの演奏はまったく姿を消してしまい、この作品はほぼ室内楽か独奏曲扱いになってしまったのですが、今回の演奏は、多少の不満はあるものの、そういう流れに対してカウンターパンチを喰らわしたような爽快な主張をもった快演だと思います（演奏自体が二流なのは、残念ですが）。

話しは変わりますが、昨年暮れ、それまでうちの部署にいた若い女性が結婚退職したのですが、退職時に、「ゴールドベルク変奏曲」(ギルバート:cemb)のCDを送ったところ、年明けに彼女から年賀状が届いて、その文面を見て、驚嘆した。「子供も無事、11月に生まれました。あのCDは毎日聴いています。生まれた子供にも聴かせています」クラシックにはまるで無縁で、現在流行のJ-Popのコンサートにしか行ったことのない彼女と、これから未来を生きるであろう生後間もない子供のいる部屋に「ゴールドベルク」のあの旋律が静かに流れているということ自体に、自分は感動してしまう。

時空を超えたバッハの偉大さを改めて認識した次第であります。

それでは、ご健康に気をつけて連続演奏の方、頑張ってください。

後援会員からのおたより



原田 知子（後援会員）

梅雨も本格的になって参りました。お変わりございませんか。

先日のコンサートでは、期待どおり大きなエネルギーを与えられました。野尻でもう一度聴くことができると思うととっても楽しみです。

その際、“スーパー農学”の御本をありがとうございました。盛り沢山の内容で、楽しく読ませていただいております。大豆のハトの食害には、私も畑で苦労したことがあります。遺伝子組替え食品はもっと歴史に耐えてからでなくては…。納豆は重症の食中毒で入院された一家があったので…。いろいろ思いながら読みました。

田んぼを借りて5年目ですが、農業を他の産業と同じ位置に考えてはいけなさと実感します。農大も、細胞を切りきざんでいくのと同じくらい、フィールドも重視しつつ欲しいなア…と思います。

◇原田様から、7月2日（記念懇親会）のために、たくさんのバザー用品をご恵送いただきました。

野尻湖・神山教会特別演奏会 2001年8月4日(土)19:00 開演

プログラム

カンタータ第9番《救いは のぞめり》BWV 9

無伴奏ヴァイオリン・パルティータ 第1番 BWV1002 より

カンタータ第29番《み神に 謝しまつらん》BWV29

カンタータ第140番《目覚めよと呼ばわる ものみの声高し》BWV140

演奏者

ヴァイオリン=小田幸子 ピアノ=内山亜紀 合唱=東京バッハ合唱団 指揮=大村恵美子

入場無料

お申込み／お問合せ先：東京バッハ合唱団

東京バッハ合唱団は、8月2日(木)から5日(日)、長野県・野尻湖レイクサイドホテルで、3泊4日の合宿をおこない、4日(土)の午後7時に、対岸の神山教会で特別演奏会を開きます。

この合宿には、後援会員をはじめどなたでもご参加いただけます。参加または演奏会当日のみの宿泊をご希望の方は、あらかじめ合唱団事務局にお申し出くだされば、詳細をご案内します。

(宿泊先および神山教会のもより駅は、JR信越本線の「黒姫」駅または「妙高高原」駅です)

されるものがあり、あらためて、私自身にはとてもついてゆけない、人間の側からの虚構のあくなき構築に、恐ろしささえおぼえます。

まず、カトリック教会で公認されている「典礼暦

マリア信仰 — この偉大なる迷妄、あるいは渴仰

大村 恵美子

この数年、私は私の半生(?)かけての心中のわだかまりを、ことばにして言い表わすようにしてきました。合唱団月報のなかでも、イエス観や天使観その他となつて語られ、そしてまたここに、聖母マリアをとりあげようというのです。

イエスの母マリアと、マグダラのマリアという、新約聖書に登場する2人のマリアの位置づけは、早くから私のキリスト教理解のなかでも大きな関心事でありつづけてきました。またJ. S. バッハの作品中でも、この2人の役割には、バッハの信仰の核心にせまる重要な契機がひそんでいることがうかがわれます。合唱団として、今後もとり組んでゆくことになる「クリスマスオラトリオ」、「ロ短調ミサ曲」(とくにクレード)、「マニフィカト」等々には、例外なくマリアの存在が大きくからんで歌われています。

こういう折りに、また注目すべき本が訳となって出版されました。シルヴィ・バルネイ(1964年生まれ)著、船本弘毅(1934年生まれ)監修『聖母マリア』創元社、2001年4月刊(ガリマール「知の再発見」双書)。

著者はパリ・カトリック大学講師、監修者は東京女子大学学長(プロテスタント系)。マリア信仰の変遷を2000年の現代まで客観的に辿ろうとする著者の目は、全人類的な現象の課題と受けとめているようであり、それに対しプロテスタント側の監修者も、「本書がマリアへの正しい理解を深め、西欧社会、また近代世界のこころを知るしおりとなることをこころから願っています」と協調的です。

カトリック教会暦に溢れるマリアの祝日

ただ、おびただしい古今の芸術作品のマリア像を鑑賞してゆくかぎり、こんなに美しく興味あふれる対象もまれですが、それをつくり出し、生み出した人類の心の歴史を見てゆけば、そこにはたえず大きな論争があり、対立があり、戦争や殺りくまでもくりひろげていった、ただならぬ人間の情念の闇が現在までつよく引きつがれてきているのです。その流れを、一望のもとに教えてくれるこの本には、啓発

におけるマリアに関する主な祝日」なる一覧表をあげてみますと：

- 1月1日：神の母聖マリアの祝日(5世紀に導入)
- 2月2日：マリアのお清めとイエスの神殿奉獻の祝日(7世紀に導入)
- 2月11日：ルルドのノートルダム(1907年、ルルドでのマリアの出現)
- 3月25日：受胎告知の祝日(7世紀に導入)
- 5月31日：聖母訪問の祝日(1389年)
- 聖霊降臨祭の3週間後の土曜日：マリアの汚れなき聖心の祝日(1944年)
- 7月16日：カルメル山のノートルダムの祝日
- 8月15日：聖母被昇天の祝日(1950年)、聖母のお眠りの祝日(7世紀)
- 8月22日：女王マリアの祝日(1954年)
- 9月8日：聖母マリア誕生の祝日(7世紀に導入)
- 9月15日：悲しみの聖母の祝日(1814年)
- 10月7日：ロザリオのノートルダムの祝日(1573年)
- 11月21日：ノートルダムの奉獻の祝日
- 12月8日：無原罪の御宿りの祝日(1907年)

その他、区別するのにめまぐるしい祝日づくめ、それも、その一つ一つについて、真剣な討議の結果、厳選の上とりいれられてきたようで、「これらのことを認めない者は破門に処す」。

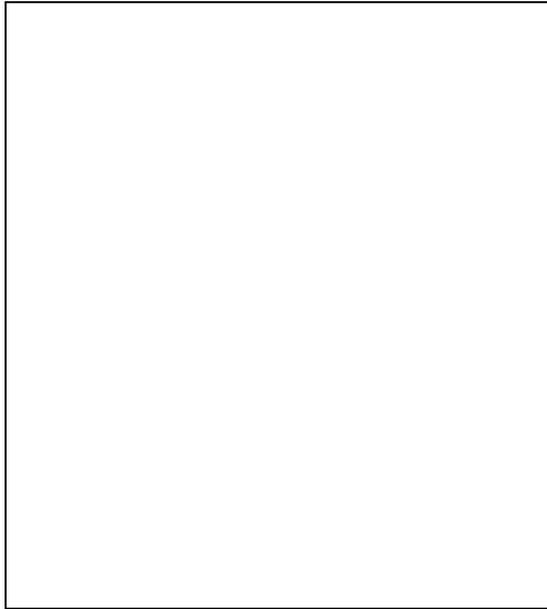
時の権力の象徴に用いられたマリア信仰

この上もなく慈愛にみちて、人類の苦悩に慰めをあたえるとされるマリアが、この本の歴史的叙述のなかでは、しばしば教会的あるいは世俗的な権力の強力な象徴として、人々の上にのしかかりつづけたことが伝えられます。

このあたりの消息を、しばらく引用でご紹介します。「マリアの処女性に関する論争は、男性と女性、人間と神、肉体と魂の関係などについて激しい議論がなされていた、当時の教団内部での争いの象徴だ

った。」…「このような論争が行なわれるなか、ニカイア宗教会議（325年）とコンスタンティノーブル

た〈マリア＝教会〉というイメージが最終的に確立されたことは、マリア信仰が神学のなかで重要な位



宗教会議（381年）において、〈処女マリア〉という称号が承認されることになった。」…「こうし

た出来事は、古くから信仰を集めていた異教の女神たちに代わって、すでにマリアが人々の信仰の対象となっていたことを意味している。」…「皇帝のイメージを借りたこのような描写は、絶大な権力をもったキリスト教がこの世を支配することを示している。また、キリストの母であるマリアも、もはや小さな共同体の内部で崇拝されるだけの存在ではなくなっている。事実、彼女はこれ以降、帝国内のすべてのキリスト教徒によってあがめられる存在となり、あらゆる異端の教えに対する正統性の象徴となった」…「聖画像のなかで豪華な衣装を身にまとったマリアは、威厳にみちた姿で帝国を支配する〈女帝〉として描かれている。」…「626年、敵軍に包囲されたコンスタンティノーブルに出現した聖母マリア—こうして、マリアが神と人間とのあいだをとりもつ存在であるという考えが広まり、マリア信仰が大発展をとげるきっかけとなった。」

「西方教会におけるマリア信仰は、キリストの地上における代理者であるローマ教皇の権威が確立したころから普及しはじめた。」…「751年にカロリング朝がフランク王国の実権をにぎると、マリア信仰はしだいに権力者によって利用されるようになった。」

「4世紀以降に少しずつ形成されていったこうし

置をしめ、大きく発展する結果を生んだ。」…「マリアは天界で、さまざまな階級からなる天使の団を統率する役割をもつようになり、天の女王として栄光の玉座をあたえられた。また地上でも、司教や司祭、修道士といった階級のいちばん上に位置し、同じく地上の秩序をまもる存在とみなされた。」…「フランク王国を支配したカロリング朝と同じように、ドイツのザクセン朝でも、国王の権力を正当化するためにマリア信仰が利用された。」…「マリアが起こす奇蹟は、聖書の福音書のなかでイエスが行なった奇蹟の再現だとみなされ、北はイギリスから南はスペインまで、キリスト教社会全体に広まっていた。」

「さらに時代が進むと、マリアは男女を問わずすべての人にとって精神的な母となった。14世紀前半には、同業組合や、都市、大学、信徒会など、たくさんの団体がマリアを守護聖人としてあがめるようになった。」…「こうして、楽園から人類が追放される以前の、罪のない世界の象徴である〈慈悲の聖母〉の広いマントは、すべての人間に向けて開かれるようになったのである。」

宗教改革以後

「聖書の原典に立ちもどることを提唱したユニストや宗教改革者たちは、マリア信仰を迷信であり偶像崇拜だと非難していた。」…「マリアの役割も福音書に書かれていることだけに限定し、それ以外の

要素をつけ加えてはならないと主張した。」…「しかし、宗教改革者たちはマリアを、神の〈はしため〉として信仰に生きた女性という点から賛美していた。」

しかしカトリック側の教会改革は、それ以上に強力な武器としてマリア信仰を利用してゆきます。

「17世紀にヨーロッパ諸国で絶対王政が成立しはじめると、マリアは国王の権力を強化するための象徴として利用されるようになった。征服した植民地にもマリア信仰は輸出され、やがて先住民たちからも熱烈な信仰を集めるようになる。」

「19世紀初頭のヨーロッパ社会は、フランス革命による激動の時代を乗り越え、政治的にも宗教的にも再建の道をたどりはじめていた。」…「しかしそれまでの合理主義に対する反動であるかのように、マリア信仰は極端なまでに熱狂的で感傷的な傾向を強めていった。」…「マリアの幻視と出現は、カトリック教会におけるマリア信仰に新しい側面をあたえた。」…「しかし、自由主義と反権威主義にもとづく新しいキリスト教の思想が広まった19世紀のヨーロッパ社会では、マリア信仰はだんだんと保守的なイメージを象徴するものになっていった。」

現代のマリア

「20世紀前半のカトリック教会は、伝統・権威・反近代主義をモットーとして掲げ、急進的かつ非妥協的な姿勢をとっていた。このようなカトリック教会を支えたのが、〈平和の女王〉としてのマリアのイメージだったのである。」

「1962-1965年の第2ヴァチカン公会議では、〈神と人間との仲介者は、キリストただひとりである〉という聖書の原点に立ちもどった結論が出された。また1964年ローマ教皇は、マリアに〈教会の母〉という称号をあたえた。」…「これ以降のカトリック教会は、プロテスタント教会や東方正教会と積極的な対話を行なう方針へと転換したのである。」…「キリスト教の歴史のなかで、マリアの役割は長いあいだ論争的となってきた。しかし、さまざまな議論を超えて、確実に言えることがひとつある。それはマリアの姿には、人間が求めつづけてきた神の姿が、確かに反映されているということだ。」

これが著者の結論です。その少し前に、いまやマリアを崇拜の対象としているのは、キリスト教徒だけではなく、イスラム、ヒンドゥー、仏教などの教徒の国にまで広まっていった、としています。〈慈悲の女神〉であり〈優しい母親〉であるというところに共通点を見出し、救いを求めたのだということです。

マリアに何を求めるか？

さて、皆様は、どのようなことをお感じになるでしょうか。不敬、不遜をおそれながらも、私が考えるのは、父なる神も、子なるイエスも、聖霊も、そしてまたマリアも、どれもみな、人間の側から渴仰する神のイメージの部分なのではないか、ということです。神は男性か女性か、イエスは神か人間か、マリアは女王か慈母か、その種の定義づけに論争をかわすわれわれ人間は、神から見れば、おかしくてたまらないのではないのでしょうか。

幼児がたいせつに持っているカードで、怪獣の家族とその関係図を教えてもらったことがあります。私は、おとなである私たちが神の系図を探るのも、似たようなものではないかと思うのです。探っても解明することができないものを、たくましい想像力と征服欲でどんどん補って、満足ゆくような知識体系を築きあげ、それを承認しない連中は、不信仰者として、「破門に処す」。

世の中が乱れて、よるべない日々投げ出されると、優しく強く頼りがいのあるマリアを求めてすがりつく。どの彫像、どこの教会、どこの聖地のもの



でも、マリアであればよいのだったら、それは、イエスの母として実在したあのマリアでなくてもいいわけでしょう。それよりも、人間という人間がみな共通して求めている神が確かにあり、その母親的慈愛の姿が、マリアだったり観音菩薩だったりして、それぞれの心に入っているのではないのでしょうか。

自分がほしいものを、神だとかキリストだとかマリアだとかに求めて追いすがる人間を、「主よ、あわれみたまえ」。私のイエス観は、すでにご承知のように、〈権威〉〈支配〉の正反対と考えますので、マリアの冠もマントも、バラの花も、ほとんどすべてが誤りだと思います。〈マニフィカト〉を歌ったマリアは（「ルカによる福音書」1章46節以下）、むしろ素朴で貧しく、神が権力をこらしめることを知っているような娘だったと思えるのです。マリア信仰は、フロイトやユング流の深層心理学的関心からばかりでなく、もっと幅広く根づよい人類の渴仰のもとに生きてきた流のような気がします。芸術の根源でもあり、これからも追求してゆこうと思っています。でも個人的には、形となったマリア像やキリストの十字架像に、私は人間の業（ごう）のおそろしさを感じて、どれも好きになれないのです。ひたすら、作られたときの人々の心象を思いやることに、関心を注いでいます。

東京バッハ合唱団 創立 39 周年記念懇親会 & シンポジウム

- ◆日時 2001年7月2日(月) 18:30-20:30
 - ◆会場 目白聖公会 (JR 山手線・目白駅下車5分)
 - ◆会費 1000円 (要予約)
- 【郵便振込みで予約、または直接申し込み】

シンポジウム<心・くらし・歌>

◆発題者

務台孝尚 (後援会員、曹洞宗・宗福寺住職)

丸山真人 (後援会員、東京大学教授・経済人類学)

司会 大村恵美子

務台氏は、1956年長野県の曹洞宗・宗福寺に生まれ、駒澤大学大学院などで道元禅師の思想を学ばれた後、現在はご実家の寺を継いでいらっしゃいます。バッハ合唱団でもかつてマタイ受難曲などを一緒にお歌いになりました。曹洞宗の梅花流詠讃歌を実践しておられます。

丸山氏は、1954年三重県松阪市生まれ。東京大学大学院時代から「広義の経済学」に関心を深め、留学後、明治学院専任講師などを経て現職。経済人類学やジェンダー論など最先端の分野で、海外のさまざまな研究を日本に紹介し、研究をつづけていらっしゃいます。

このお2人から、“心と口と行為と暮らし”(Herz und Mund und Tat und Leben BWV147)について、あらためて現代的な把握を伺うことができることと存じます。

◆参加者全員の方々に、1992年発行の『東京バッハ合唱団—三十年の歴史』(大村恵美子編著)を1冊ずつお持ち帰りいただきます。すでにお読みの方が多いと思いますが、PR用としてもご利用いただきたいのです。来年は創立40周年を迎え、新しい記念誌の編集が団員の手によって現在進められています。

◆発題者を囲んでの会食

同日シンポジウムに引きつづき、20:40、目白「揚子江」、会費:4,000円(予約とともに前納、締切り6月30日)

シンポジウムについては、予約なしのご来場にも応じられますが、会食の当日参加は、準備の都合上ご容赦いただきます。

◆ご参加申込みは、郵便振替用紙にご記入の上、郵便局でお振込みいただくか、直接事務局へお申し込みください。

第18回 ばっはめいと 夏の演奏会

2001年7月22日(日)14:00-16:00

ヤマハミュージック

小田急線経堂駅南口前 ピーコック3階

(TEL03-3425-9311)

入場無料

(どなたでもご来場ください)

主催:ばっはめいと事務局

(東京バッハ合唱団内)